

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 8 月 11 日現在

機関番号：84413

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720065

研究課題名(和文) 近世日本絵画における寄合描きの基礎的研究

研究課題名(英文) YORIAIGAKI held in Kyoto and Osaka in the Latter Edo Period

研究代表者

岩佐 伸一 (IWASA, SHINICHI)

公益財団法人大阪市博物館協会(大阪文化財研究所、大阪歴史博物館、大阪市立美術館、・その他部局等・学芸員)

研究者番号：70393288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代には、複数の絵師が筆を振り、ひとつの作品を完成させる寄合描きの絵画が盛んに制作された。本研究では、江戸時代の上方を中心に約200点の作品を確認した。作例の分析を通じて、それらには多様な様式があること、多くの絵師や画派が制作に関わったこと、職業絵師以外にも絵を好む武士や公家、また庶民であっても富裕人々が手掛けたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Many YORIAIGAKI (Collaboration pictures) were drawn at the Edo period. 200 examples were checked in this research. In this research, it checked that there were many styles in YORIAIGAKI. In this research, I have given an outline of a collection of YORIAIGAKI which were held in Kyoto, Osaka, and West Japan in the latter half of the Edo-period. Up to the present few people have publicly presented any research on YORIAIGAKI in Kyoto, Osaka, and West Japan. In my research, I have confirmed that such pictures had been held over 200. I have shown a list of basic data on YORIAIGAKI which were held in Kyoto, Osaka, and West Japan in the latter half of the Edo-period.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：美術史 日本絵画 近世絵画 上方 寄合描 合作

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は、近年京坂の書画会や書画展観に注目し、写生画派と他流派が制作や鑑賞の場を共有し、密な人的交流を持っていたことを文献面から明らかにした。その途上、長澤芦雪・呉春・岸駒による「蜀三傑図」や伊藤若冲・木村蒹葭堂・公卿の日野資愛らによる寄合描きに接し、作例からも写生画派と他派の絵師、さらには身分差を超えたネットワークが構築されていたことを確認し、寄合描きの重要性を認識した。

(2) 現在の寄合描き研究は、池大雅・与謝蕪村「十便十宜図」、円山応挙・皆川淇園「東山三絶図」など一部の作品を除いて深化されていない。美術図集には作品紹介が散見されるが、総体的な把握はされてこなかった。また、用語の統一や定義づけもなされず、未紹介の作品も多数ある。一方、国文学や芸能史、日本史学からは、書画会が取り上げられその場で制作された寄合描きにも言及する。また、文化史学においては、寄合描きを論証に用いた成果がある。しかし、美術史学からの検討がされていない史料が論証に用いられたため他の史料を援用して正確性を補っている場合が見られる。これは、寄合描き作品が他分野でも有用なことを示しながらも、美術史学からの検討がなされていないための限界をも示している。このような寄合描きをめぐる現状は、美術史学の成果が不可欠な分野の学際的研究を阻む要因になることと懸念される。

(3) 近年の日本美術史は、作品論のみならず、制作や鑑賞の場、絵師の身分が作品に及ぼした影響など多様な観点から論じられる。申請者は、寄合描きが公開の場である書画会や書画展観において制作・鑑賞され、かつ絵師の身分や環境により描く位置や事物が変化するなどの諸相を示していることを、書画会研究を通じて確認した。よって本課題は、近年の日本美術史学の展開と軌を一にする時宜を得た課題である。かつ、絵師の人的交流とその影響を考察する点において、文献からのアプローチが主であった書画会研究の視点とは異なった視座、すなわち作品自体から発展させることができると考えた。

2. 研究の目的

本課題は、江戸時代中期以降、流派を問わず盛んに作成された寄合描き絵画について、江戸時代中後期の京都・大坂を対象に、次の課題を解明・遂行することを目的とした。寄合描きの日本絵画には多様な形態があるが、本課題では下記の目的に鑑みて、ひとつの絵画の支持体に複数の絵師が筆を採り描いた作品を主な研究の対象とした。画帖や卷子などにおいては、小紙(絹)片に1名の絵師が描き、それらを合装した作品が見受けられるが、これらは基本的に当該研究の対象外とした。その理由としては、本研究では、鑑賞者が一目して寄合描き作品であることが認識

できる形態の作品を取り上げることにより、絵師の表現が、他の絵師との共同制作をした場合、単独の場合と比較してどのような違いがあらわれるのかを明らかにすることが大きな目的のひとつであるからである。

(1) 作品を調査・分類し、史的展開を把握するとともに、文献面における寄合描きへの言及例を抽出する。

(2) 寄合描きの参加者(作者、依頼者)間の影響関係、制作の場や契機を明確にする。

(3) 表象の特徴、特に円山四条派と他の画派による寄合描きに注目し、写生的描法と要素の他派への影響を明確にする。

(4) 寄合描きデータベースの構築。

3. 研究の方法

(1) 文献からの作例集成による寄合描きの概略の把握を行った。大別すると、美術図集および展覧会図録からの作品抽出と江戸時代の絵画に関わる随筆や絵師の記録からの寄合描きの記載抽出に分けられる。

(2) 国内外に所在する作品調査と考察を行う。国内外の機関および個人所蔵家における作品の所在確認と調査を行った。また、描写から写生的要素の敷衍過程、絵師間の影響関係などを解析した。

(3) データベースの構築を行った。作品名、絵師名、制作年代、地域など複数の項目から検索可能なデータベースの構築を目指した。

4. 研究成果

(1) 作例の集成と文献からの記録抽出

如上の課題設定における寄合描きにかかる作例の集成を行った結果、掛軸の形態をとる作品を中心に約200点の作品を実見、確認することができた。従前、当該研究において、これだけの数量を集成した研究はなく、この分野の研究の基礎的なデータを集成できたと考える。

(2) 地域や時期、作者や制作の背景など

地域は、大坂や和歌山などの作品も確認したが、京都の絵師による作品が抜きん出て多かった。また、今後の研究の広がりにも鑑みて、上方以外の作例も参考事例として記録に努めた。多く見られたのは江戸の谷文晁や春木南湖一派の手掛けた作品であった。江戸以外にもこの種の作例は散見され、全国から絵師や文人が多数訪れていた長崎にゆかりのある作例が複数見られたほか、筑前秋月、備後尾道、但馬生野、播磨赤穂など絵師や文人、また書画に関心のある層が存在していた都邑においては、かなり幅広い地域で寄合描きの制作が行われていたことが明らかになった。このような作品の初発については江戸時代をさかのぼる可能性はあるものの、先行研究はなく、かつ当該研究の範疇ではないため明らかではない。しかし、江戸時代初期の作例として狩野派絵師による「牛馬図」(静岡県立美術館所蔵)があり、古くから制作されていたことは明らかである。寄合描きにおい

ては、画中に年記のあるものは多くはなく、明確な年代を示す作例は限られていた。しかし、手掛けた絵師の生没年から推測するに、隆盛を極めたのは江戸時代後期、概ね寛政年間（1789-1800）以降であった。作例の残存状況としては幕末期の作品が多く、当該研究では対象としなかったがこの傾向は明治時代に入っても続いていたものと推測される。寄合描きが制作された契機に目を向けると、明確な事由のある作品については、故人の追善を記念して描かれた例が複数見られた。その故人は、儒者の皆川淇園や絵師の松村景文などが挙げられ、絵師に関わりの深い人物を追善する事業として寄合描きが行われていたことがわかった。また作者未詳ではあるが江戸時代中期の大坂人によって記されたと思しき随筆『あすならふ日記』には月岡雪鼎門人の桂宗信追善会の席上、彼にゆかりのあった絵師が揃い、寄合描きを試みたとの一条がある。このことからすれば、かような契機により制作された寄合描きは、席上画の可能性を多に含んでいると推測された。また富裕な絵画愛好家が絵師を招いて寄合描きを制作させた例もあった。なかでも詳細が明らかなのは、石見国浜田藩家老岡田頼母が、当時著名であった京都の絵師山口素絢や東東洋、吉村孝敬らを宴席に呼び、席上で合作を所望した例がある。追善等の作成契機が明らかではない寄合描きも数多く存在するが、その場合には絵画愛好者が発案・希望して絵師達に揮毫を請うたものと考えられる。揮毫者に着目すると、多く見られたのは京都を本拠とした円山派や四条派の絵師達であった。円山応挙が揮毫した寄合描きの現存例は多くないが、その弟子の素絢や呉春、呉春門人の岡本豊彦や松村景文らの手掛けた作例は数多くあり、当時の人々の欲するところであったと思われる。このように当時著名な絵師による作例が存在する一方、職業絵師ではない人々による作例が確認できた。その一例をあげると、但馬国の生野代官として江戸から赴任していた白石忠太夫とその手代らが、地元の有力者であり銀山の開発を請け負っていた「掛屋」たちと寄合描きを残している。江戸出身の忠太夫は絵に嗜みがあったことが的確な運筆から明らかではあるが、その他の人物はたどたどしい表現であり、絵画的には全くの素人であったと見ることができる。しかし、画技の優劣を問わず、同一画面において筆を振り、作品を完成させる行為自体が、制作者または制作発案者の最も重要視する点であったことが当該作例より明らかになり、寄合描きを評価する点で、その制作行為自体が注視されるべきという、新たな視座を見出すことができた。

(3) データベースの構築

作例の検索を容易に行うことを目的に、データベースの構築を進めた。その設計にあたっては、金沢美術工芸大学附属図書館「絵手本データベース」、国文学研究資料館「日本

古典籍総合目録」などを参考にした。検索項目としては、作者・作品名・年代・所蔵など基礎的な項目から検索できるようにし、詳細な作品のデータは、煩雑化を防ぐため備考程度にとどめた。現時点では、文字情報のみが検索できる設計とした。画像の表示については、所有権などの問題を解決せねばならず今後の課題となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

岩佐伸一「大坂の唐画師による寄合描き〔飲中八仙図〕について」、『大阪歴史博物館研究紀要』、第9号、33~44頁、2011年

岩佐伸一「円山派と四条派による寄合描き〔秋七草図〕について」、『大阪歴史博物館研究紀要』、第10号、105~112頁、2012年

岩佐伸一「十二卿寄合書画軸について」、『大阪歴史博物館研究紀要』、第11号、105~114頁、2013年

〔学会発表〕(計1件)

岩佐伸一「江戸時代の書画会・書画展観に見る女性絵師」、「描いた女性たちに関する研究 桃山時代から明治・大正期まで」、2012年11月17日、於実践女子大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩佐 伸一 (IWASA Shinichi)

公益財団法人大阪市博物館協会・学芸員

研究者番号: 70393288

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：